

若き農業経済学者が垣間見た英国

大森けんいち

「アイ、あなたは人間としてとても不幸だと思うわ」

90 歳の高齢にも関わらず背筋をピンと伸ばし、上品な身のこなしの英国婦人が、妻の瞳を見つめながら、静かな口調で語った。そして、彼女は微笑を浮かべながら続けた。

「人間の一番の幸せは、生まれたての我が子の顔を見ることにつきるわ。そして、ひ孫の顔を見ることができて、やっと人間としての責任が果たせるのよ。そうすれば、安心して死ぬことができるの」

私たち夫婦の不妊の苦労話に端を発した会話の一コマである。実は、この老婦人に限らず、不妊の話を英国人にすると、たいいてい悲しそうな顔とともに「あなたたちは不幸だ」という言葉が返ってくる（日本人の反応は「あせり過ぎているからだよ。そのうちできるよ」という無責任なものか、「二人の生活もいいと思うよ。子供がいたって幸せとは限らないし」という無神経なものが多いのだ）。ただし、英国人は次のようなユーモアも忘れない。

「ケン、勉強ばかりしていないで、休暇をとってアイと一緒に暖かい国へ行きなさい。英国は子作りには寒過ぎるわ」

英国人は、一方で子供のしつけも徹底している。大人の集まりで、子供が騒ぐと、場が瞬時に凍りつき、他人を含む大人たちから一斉に険しい視線が子供に注がれる。そして、子供は非を悟り沈黙するのである。

もちろん英国人は子供に厳しいだけでなく、自らが模範を示すことも忘れていない。私がこちらで驚いたのは、高齢の紳士淑女がよく動くということだ。何かの催しがあると、80 歳をとうに越えたお歴々が率先して動き回り、当り前のように若い者に奉仕するのだ。彼女らはこう言う。「私たちは若い人の模範にならなければならないの。だから若い人に模範を示す意味で奉仕をするのよ。若い人は今度は自分たちより若い世代に奉仕をすればよいの。順番ということね」

以上は、私たち夫婦が英国の古い大学町に滞在していた時の話である。地域性もあるし、英国は紳士淑女の国であるのと同時に、フリーガンの国でもあるので、上記の人々を代表的英国人と見なすことには少々無理があるかも知れない。

しかし、英国人の健全な人生観の状況証拠となる数字もある。たとえば、英国の合計特殊出生率は、1950年の2.19から2003年の1.71に変化し、この半世紀間ゆるやかな低下傾向を示してはいるが、日本に比較するとはるかに安定しているのである。

英国の農村に目を転じると、訪れる誰もが賞賛してやまない美しい田園風景が広がる。その背後には厳しい現実もあるのだが（たとえば、H. ニュービー著・生源寺真一監訳『英国のカントリーサイド』楽游書房を参照）、私にはここで垣間見たような英国人の人生観が、農村の端正なたたずまいに色濃く反映しているように見えるのである。

